

モンゴル族を中心とする添加茶文化圏の形成に関する研究

A study on the construction of Suutei Tsai cultural region centering the Mongols

趙 方任¹, ウリジバヤル², 伊藤 みちる³

Fangren Zhao¹, Wulijibayaer², Michiru Ito³

¹大妻女子大学国際センター, ²新潟産業大学経済学部経済学科, ³大妻女子大学国際センター

キーワード：蒙古族, 茶, 添加茶

Key words : Mongolian, Tea, Suutei Tsai

1. 研究目的

中国喫茶文化は長い歴史を持ちながら、かつ今でも新しいブームを引き起こし続けている。つまり、今でも愛され続けている数少ない伝統文化の一つである。それゆえ、喫茶文化の研究も盛んであり、数多くの成果を挙げている。しかし、多岐に渡った喫茶文化に関する豊富な研究成果をまとめてみれば、あまり研究されていないほぼ空白の状態の分野が二つあるとはっきり分かる。

一つ目の研究空白分野は「添加茶」文化である。

茶は飲み物として大きく分けると二つの飲み方がある。「清飲法」（ほかの飲食物をいれず茶の湯のみを飲む方法）と「添加茶法」（茶の湯にほかの食品を入れる喫茶法）である。日本の抹茶道と煎茶道を含め、日中両国は「清飲」を主流としているが、中国のモンゴル族をはじめとする少数民族、ロシアを含む欧州諸国、中央アジア・西アジア、北アフリカ諸国などは「添加茶」を主流とし、喫茶人口にしても、茶消費量にしても、「清飲法」に後を取らずとも、むしろ勝っており。

一方、喫茶文化の研究において、「清飲法」はよく研究され、手前、道具、水、環境、茶人、思想、歴史、植物性、健康法、文献、民俗等あらゆる面に数えきれないほど成果をあげている。藤軍の『中日茶文化交流史』、本研究代表者の『中日茶文化逸事比較』など日中両国間喫茶文化の比較に関する成果や、Victor H.Mair・Erling Hohの『茶的真實歴史』のような西洋研究者の成果も少なくない。対して、「添加茶法」に関する研究及びその成果は皆無に等しいほど極めて少ない。

二つ目の研究空白分野は「元代喫茶文化」である。

中国史上の王朝は唐代以降では、周知の通り「唐、

宋、元、明、清」という順番になっている。中国の喫茶文化の発展・変遷史も完全一致とは行かなくても、ほぼ上記の「唐、宋、元、明、清」の流れと重なっている。唐代は喫茶文化の確立期で、「煎茶法」がメインであった。宋代は喫茶文化の繁盛期で、日本の抹茶道の源にもなっている「点茶法」がメインであった。明代は皇帝の命令で塊の「団餅固形茶」を廃止した結果、現代のような茶葉がバラバラの「散茶」が流行し、また日本煎茶道の源にもなった。清代は散茶の異なる製造技術が発明され、「緑茶、白茶、黄茶、青茶（ウーロン茶）、紅茶、黒茶」という茶の全六種類が揃うこととなった。

これは簡単すぎるまとめであるが、中国喫茶文化の歴史であり、変化の歴史でもある。しかし、「唐、宋、元、明、清」の時代順の中で「元代」だけが抜けている。これは申請者がわざと「元代」を避けたのではなく、今まで元代喫茶文化に関する研究がほぼなく、元代茶の真実はまだ究明されていないためである。

元代喫茶文化の研究について、今までは王玲『中国茶文化』（1992）のように中国「元代」の茶文化を「宋代」に付随して語るか、あるいはVictor H.Mair・Erling Hohの『茶的真實歴史』（2018）のように「元代」をスルーして、宋代から直接明代へと「元代」抜きで語っている。孫洪昇の『唐宋茶業経済』（2001）のような時代限定の研究も数多く見られるが、唐代宋代のものが多く、明代清代がこれに続くが、元代に関する研究だけは見当たらない。日本では高橋忠彦・趙方任の『雪村友梅の「茶寮十事」訳注』（2001）があるが、日本五山文学の資料を利用したもので、また茶器の研究のみであり、「元代喫茶文化の全般的な研究」には

程遠い。

本研究代表者は長年中国喫茶文化の研究に取り組み、特に唐代、宋代の喫茶文化を中心に研究してきた。『唐宋茶詩輯注』、『唐宋時代之花茶文化分析』、『唐宋時代“添加茶”文化研究』、『宋代飲茶文化美学意識研究』などの成果を挙げた。そして、次の研究を「添加茶文化」と「元代喫茶文化研究」に定めた。周知のとおり、中国の元代はモンゴル族による政権である。また、添加茶の世界中における伝播はモンゴル族によるところが大きい。従って、この二つの研究空白分野は関連性の深い課題になる。

この二つの空白を埋めるために、本研究代表者は「モンゴル族喫茶文化の様態研究」、「モンゴル族を中心とする添加茶文化圏の形成に関する研究」、「元代喫茶文化の特徴と全体像研究」という三段階に分けて研究を展開していく予定である。その第一弾として、2019年度の共同研究プロジェクトの助成を利用し、モンゴル族の喫茶文化を考査して、『モンゴル族の喫茶文化の考察と研究』を発表し、モンゴル人喫茶の本質及び起源の究明に対して成果をあげた。そして、本研究はその第二弾として、添加茶文化の形成及び西諸国への伝播において中核的な役割を担ったモンゴル族、チベット族、満州族の三民族それぞれの喫茶法を比較し、添加茶文化圏の形成実態を究明していき、さらに三民族喫茶の相違点を考察することにより、添加茶文化の地域性を研究していく。

2. 研究実施内容

モンゴル族を含む諸少数民族は文化記録に長じず、喫茶に関する文字史料がほとんど残っていない。一方、生活文化を固く守り、伝承していく性格が強い。つまり、伝統茶文化が現代生活喫茶に根付いているという特徴がある。本研究はこの特徴を利用し、添加茶文化圏の形成実態を究明するために、「文献史料と現地実態調査の相互検証」手法で展開していく予定だった。

しかし、昨年度、コロナ感染拡大の影響を受けて、モンゴル族に関する現地調査を行うことは出来なかった。そのため、予定をすこし変更し、現地調査の代わりに文献研究に専念した。

文献史料研究は拙著『唐宋茶詩輯注』と元代詩人が創作し、現在に残された14万首の詩作を収録する『全元詩』を中心に、解釈、解析を行った。今の時点で、『全元詩』から喫茶に関するすべての

詩を抽出する作業はすでに完了し、『元代茶詩全集』の編集作業を行い、年度内に出版する予定である。また、すべての茶詩の中から「添加茶」に関する作品を抽出し、分析作業も行い、下記の成果をあげた。

「添加茶文化」は凡そ三つのルートで形成されている。一つは、中国南方地域で、果実や胡麻、塩などを茶湯の中に入れる習慣である。この習慣は凡そ宋代に始まり、次第に広まった。今でも杭州など江南地域に新年伝統行事として、四川省、湖南省などの地域で婚俗行事として定着しているところもある。一つは中国北方の少数民族、特にモンゴル族を中心として、茶湯の中に乳製品、肉類を入れる喫茶文化がある。これは宋代の末期に始まり、元代明代にチベット仏教密宗とともに広まった。さらに、モンゴル族の遠征とともに今のモンゴル人民共和国及び中央亜細亜に伝播したと思われる。そして、もう一つは清代に紅茶文化の欧州への伝播とともに広まった茶湯に砂糖類を入れる喫茶習慣である。

また、審美価値観から言えば、「添加茶文化」は「清飲法」への否定という形となり、その影響で元代喫茶文化は喫茶精神への追求が弱まり、単なる日常生活の習慣としての定着が早まったと分かる。そして、文人の「貢茶」への憧れが弱まること、点茶法への追求が少なくなること、「茗」という茶の異名の使用頻度は「茶」の使用頻度とほぼ並んで歴代の中で最多であること、喫茶用水として新しい名水が登場してきたことなど、唐代、宋代に見えないいくつかの新しい現象が現れたと、判明した。

研究成果として、年内に『中国唐代、宋代と元代の喫茶文化の比較』という論文を投稿する予定。

3. まとめと今後の課題

今回の研究は前述とおり、文献中心の研究となり、その研究成果に現地調査による補完検証及び裏付けが必要である。これから、現地調査やZOOMなどオンライン調査手法を合わせて利用し、研究を続けていきたい。

また、上記研究の結果を踏まえて、本研究の続きとして、「元代喫茶文化の特徴と全体像」を究明していきたい。